なお行き行きて 武蔵国と下総国との中にある隅田川のほとりにいたりて 都のいと恋しうおぼへければ しばし川のほとりにおりゐて 思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかな」と思ひわびてながめをるに 渡守 「ほや舟に乗れ。日暮れぬ」と言ひければ 舟に乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さる折に 白き鳥の嘴と足と赤き 川のほとりに遊びけり 京には見えぬ鳥なりければ みな人見知らず 渡守に 「これは何鳥ぞ」と問ひければ 「これなむ都鳥」と 言ひける 聞きてよめる

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ 舟こぞりて泣きにけり

伊勢物語 第九段

みやこ の名をもつ鳥ならば 都のことも知っていよう だから尋ねるのだ都鳥よ
私が大切に思っている あの人は 元気でいるだろうか 生きているのだろうか

（隅田川の言問橋は この歌に因んで命名されたもの）

在原業平